

# いちかわ 自然観察 ガイドマップ 2



**～地域のあらまし～**  
市川市の北東部に位置するこの地域は、地域の半分以上が市街化調整区域で、市川市で最も緑が残っている地域です。下総地方に特徴的な谷津地形をそのまま残した大町自然観察園や、柏井の雑木林をはじめ、県下でも有数の産地である梨園、残りわずかになってしまった水田など、里山的風景を体験できる地域です。

## 市川市

### 市川自然観察ガイドマップについて

市川市では、市民の皆さんに身近な自然環境に目を向けていただき、そこに生息する動植物の姿や自然のしくみについて知っていただくため、市川市を6つの地域に分け、地域ごとに順次自然観察ガイドマップを発行しています。市川市の自然環境は決して豊かとは言えませんが、海、低地の市街地、川、谷津、斜面林、台地上の農地など、バラエティーに富んでいるのが特徴です。自然観察ガイドマップは、地域の自然の見どころを紹介したマップとあわせて、市川市の自然を観察する上でのテーマを、各マップに10テーマずつ合計60テーマ紹介しています。どうぞ休日のお散歩のお供にしてください、身近な自然をお楽しみ下さい。

市川市では市川の自然を紹介する下記の資料を発行しています。

- 発見・市川の自然
- 市川の自然・緑と水辺のまるごとガイド
- 江戸川放水路・生きものまるごとガイド
- 市川市巨樹・巨木林調査報告書

また、歴史や文学に関する出版物も発行しておりますので、詳細についてはお問い合わせ下さい。

**市川自然観察ガイドマップ2**  
北部Ⅱ（大町～柏井～宮久保）  
平成18年3月（改訂）  
発行 市川市  
編集 市川市環境清掃部自然環境課  
自然環境専門員 高野 史郎  
〒272-8501 市川市八幡1-1-1  
Tel.047(334)1111（代）

定価50円（税込）

### 長田谷津と自然観察園

大町の自然観察園のあるところは、長田谷津と呼ばれています。下総台地特有の谷津地形で、縄文時代に海が入りこんでいた細い谷で、人々の暮らしと密接にかかわってきた里山です。昭和40年代（1965～）までは水田耕作が行われていましたが、減反政策により放置されて戦前の湿地の状態に戻ってしまいました。その休耕田を利用した自然公園を作れないかという話題がでたのは昭和45年（1970）でした。湧き水ときれいな小川が流れる環境には、サワガニ、ホトケドジョウ、スナヤツメ、シジミ、ヘイケボタルなどが生息しています。施設は観察路とあずま屋、ベンチ程度とし、人工的なものはいっさい作らない大町自然公園として開設されたのは昭和48年（1973）3月でした。谷の両側に続く斜面林は、かつての新炭林としての雑木林から、次に照葉樹林へと遷移が進んでいるところもあります。今までここで観察された植物は400種、昆虫類が380種、鳥類100種です。多くの谷津が本来の姿を失ってしまった今、ここは市川ばかりでなく東葛地域に残されたほとんど唯一の貴重な谷津です。市川全体で記録されているものの、半分に近い多様な生物種が見られる貴重な自然です。



芽吹きとヤマザクラが咲く春の自然観察園

### 切り通しや露頭を見よう

標高20～25mぐらいの台地の中に、標高5m前後の低地が深く入りこんでいるのが市川の谷津地形です。その境には斜面林が残されていて、ところによっては崖が切られて地層が露出しているところも見つかります。そんな時は大昔の地形、火山が噴火していた時代のこと思い出してみよう。関東ローム層とか成田層という言葉、あるいは洪積台地とか沖積世などの言葉を学んだこともあったね。地表の土が黒っぽいのは、堆積した落葉が長年の間に少しずつ腐って腐植になったものです。その下の茶色の赤土にも色の違ういくつかの層が見られます。大木の根がせり出していたら、タネからの最初の芽生えの地点はどこだったか、今はどこへ根を伸ばして大地へくこんでいるのかを調べてみましょう。幹と枝張りには風向きや日の当たる方向に傾いていませんか？ 竹などが生えていたら、放置された林の中に入りこんだものかもしれません。コケやシダは空気中の湿度や大気汚染などのバロメーターといわれています。切り通しは風の通り道でもあります。風の気配、雨水の行方も確かめてみましょう。



昔の地形は？ 道路はいつ作られたのだろう

### 姥山貝塚で昔の暮らしを考える

JR武蔵野線東側の柏井の台地上に位置する姥山貝塚は、縄文時代中期（約4500年前）から後期（約3000年前）に作られた馬蹄形の貝塚です。歴史博物館横の堀之内貝塚と同じように、ハマグリを主体に30種類以上の貝が出土しています。明治26年（1893）に最初の発掘がされて以来、何度も調査されてきました。大正15年（1926）には人骨や遺物とともに炉址も発見されました。堅穴住居跡に5体の人骨が事故死のような状態で見つけれられたのは、どんな災害がふりかかったのでしょうか。市川では12000年くらい前から、石器を使う人々が住み始めていたと考えられています。その後、温度が低くなり海面が下がったため、貝や魚がとれにくくなり、無人の状態が続いた何百年間かがあったようです。いま史跡として残されている姥山貝塚は、きれいに草が刈られた広場になっています。芝生だけのようですが、よく見るといろいろな草がまがっています。南側には市川には珍しいツブラジイの並木もあり、いろいろなドングリが拾える楽しい場所でもあります。姥山貝塚からは、これまでに39の堅穴住居跡と120体以上の人骨が出土しているそうです。



姥山貝塚公園の南側、シヤカシの並木

### 湧き水と水の流れ

台地に降った雨は地面にしみ込んで、斜面の下などから湧水として湧き出します。市街化が進む前の市川には、春木川の東側、派川大柏川の北部、大柏川の東側など40か所もの湧き水の記録が残されています。一番多かったのは池の中に湧き出していたタイプですが、宮久保には自噴井戸があり、ショウガなどの野菜や農具を洗うなどの利用が今も続けられているところもあります。民家に立ち入らずに見られる湧き水としては、里見公園下の羅漢の井や大町の自然観察園でしょうか。深いところから湧き出した水は、その地域の平均気温に近づき市川では15℃くらいです。夏は冷たく冬は温かいといわれるのはそのためです。地下での水の流れは、1年に1mくらいとゆっくりとしていて、何年も何十年も前に降った雨がしみ出してくるといわれています。自然観察園の湧き水は、周辺のナシ畑に降った雨が、長い年月の中でしみ出しているのでしょうか。この水は観察路の中を南へ進み、多くの生きものの命をぐんんでいます。大柏川から真間川へ、そして三番瀬の東京湾へと流れていきます。



北側の台地からの湧き水が見られる宮久保付近

### 万葉の植物を集めた万葉植物園

平成元年（1989）にオープンした万葉植物園には、万葉集ゆかりの植物や、当時から親しまれていた植物など、約200種が植えられています。万葉集は、4500首もの歌を集めた現存最古の歌集です。ここに登場する植物は約155種類、植物にかかわる歌は1700首といわれています。植物名には、おもひぐさ（ナンバンギセル）、かたかご（カタクリ）のように古い名のものであれば、おみなえし、はまゆうのように今も通用するものもあります。しかし、1300年前後も昔のことです。歌に詠まれている植物名が、今のどの植物に相当するのか、スケッチや標本などの確かな証拠が残されているわけではありません。歌の中の形や色に関係ありそうな表現、植物分布や日本への渡来の歴史などもあわせて植物名を推測することになるわけで、異説も多いのです。秋の七草にも詠まれている“あさがお”は、キキョウのことだろう、といわれるのはその一例です。万葉集で市川にかかわる歌は10首ほどありますが、このうち7首は真間の手児奈伝説を詠んだものです。千葉街道から手児奈霊堂に向かう大門通りは万葉の道、市川の書家による万葉の歌のパネルが飾られています。



万葉の和歌と万葉植物の解説

### キノコ——大地の掃除屋

林の中に入って行った時、キノコを見つけた人から必ず出る質問は“食べられますか？”です。鳥や昆虫を見て“食べる”を連想する人はいまだから、それだけキノコは味覚と結びついているのでしょう。キノコは木の子、菌の花。根もとの落葉をソックと除くと、白い綿のような菌糸体が広がっています。これが根に相当する部分、土から栄養を吸収するキノコの本体です。キノコの類は、少し前までは、カビなどとともに、植物の仲間も含めて、動物と対比させていました。しかし、キノコは葉緑素がないから光合成はできません。生態系の中で有機物の分解を担うグループとして菌類を独立させて、動物・植物と並べて区分する考えが広がっています。同じ種類のキノコでも、生育環境や成長する段階で形や色に変化していきます。かさ・ひだ・つば・くき・つばの5つの部分と、ついでに木や落葉の状態を確認しましょう。日本にはえるキノコは、2500種とも5000種ともいわれています。地球上からキノコ類が絶滅したら、落葉も枯枝もそのまま、ゴミの山になってしまいます。



チップを敷きつめた散歩道に生えるキノコ

### 大柏川の植物遷移

隣接する鎌ヶ谷市からの生活排水を受けて流れる大柏川ですが、水面近くに下りられる場所もあります。多自然工法で改修された区間の川辺には、四季の野草が茂ります。誰もタネをまかないし、苗を植えたりしない場所なので、大水の時に上流から流されてきたり、野鳥に運ばれたりしたものに由来しているのでしょう。春には黄色い葉の花、セイヨウカラシナが咲くところがあります。夏にはギシギシヤ、外来種のオオケタデが群落をつくる場所、クワモドキともいわれるオオバクサが2m以上に高く茂るところもあります。ところによっては、ヒメガマの群落、アレチウリが茂っているのも見られます。何年か続けて見ていると、少しずつ変わっていくのに気づきます。富栄養の水なので成長も早い。ふつうの野草群落よりも遷移が早く進むのかも知れません。そんな植物たちも、上流に大雨が降って増水すると倒されて、また新しい移り変わりが始められます。市街地に流れる川の景色は、どんな植物たちが似合うのでしょうか？ 草の茂みに、カルガモが巣を作っているのも見られる大柏川です。



カルガモが子育てもする大柏川の水辺

### 田んぼの学校・お米づくり

減反政策で休耕田がふえ、荒れ地が増えてきて、ゴミ捨て場になったりしています。子どもたちの自然体験が少なくなっている今、自分たちで力をあわせて田んぼ作りをしようという動きが広がっています。昔だったら誰でも体験したのに、サカナとりや草花あそびをしたことのない子どもが増えました。食べられる野草があることも知らない、ミズヤダンゴムシを気持ち悪がる子どももいます。田んぼの作業は、春の田おこし、代かきから始まります。5月頃の田植、6月頃に中干し、秋の稲刈りから精米。昔の田んぼにはメダカやナマズもいたのです。米づくりの作業を通して、人を含めた生きものたちの暮らし、自然と人間との関係、自然との共生が実感できるといいですね。最初から大きな計画をたてすぎると、負担が大きくなって長続きしにくくなります。少しずつ積み重ねて仲間を増やしていく方法を取りましょう。市川市内の数か所で、そうした活動をしているグループもあります。バケツやトロ箱で稲を作る方法もあります。



市川北高近くの水田に立てられたカカシ

### 市川名産のナシ栽培

市川のナシの生産は年間約6000t。千葉県下でも有数の栽培地で、技術レベルも高くおいしいと評判です。今から250年も前の明和6年（1769）、寺子屋の先生をしていた川上善六さんがこの土地に適した特産品が必要と考え、美濃の国、いまの岐阜県大垣でナシの栽培技術を学び、ナシの枝を持ち帰ったのが始まりとされています。市川は砂地で、海からの風も強く、タネも表土も飛ばされてしまう。作物や野菜作りには向かない土地だったのです。葛飾八幡宮の境内で試験栽培をはじめ、苦勞を重ねながら実用化への道を開いたのだそうです。当時、江戸の周辺にはナシの栽培地がなかったことから、大変な評判になりました。江戸時代の観光案内書にもいえる江戸名所図会には、高下駄を歩いてナシの棚から収穫する絵が描かれています。平田や新田などの平坦な低地は水田として稲作を、八幡や中山などの市川砂川上の小高い所には、ナシやモモなどが作られていました。明治27年（1894）には私鉄の総武鉄道（今のJR総武線）が開通し、ナシ栽培も宮久保から大町へと次第に北部へ移っています。



4月に白い花が咲く大町のナシ畑

### 野生生物も暮らせる自然環境を

植物が茂っているところには昆虫がいます。それを狙うクモや鳥も集まってきます。落葉が積もれば土の中にミズや無数の微生物たちもいて、ネズミやモグラは地下にねぐらを作ります。そうした生態系が成り立つために、緑が点ではなく線として、面として連続してほしいというのが“緑の回廊”の考えです。昭和初期の調査では、ニホンリス、ホンダイチ、ノウサギ、ホンギツネなどが、北部を中心にかなり広く市川全体に分布していたといわれます。水域にはイシガメやタニシ、マシジミ、タナゴ類も生息していました。ヒキガエルは両生類、ふだんは池から離れて林や人家の床下で暮らしていますが、産卵期になると生まれた池に戻るといわれています。そんな自然の池もめっきり少なくなりました。タヌキやハクビシンなどの交通事故は、年間30個体ほどの報告があります。捨てられた残飯や生ゴミを食べたり、餌づけされて増えているものもありそうです。市川北部には、昔からの野生動物が暮らせる貴重な自然環境が、少ないながら残されています。



夏の大町自然観察園のアオダイショウ





1 市川大野駅から武蔵野線沿い、階段を上ってすぐの所にある万葉植物園。格子戸をくぐると170種の万葉ゆかりの植物と、その解説が1000年前の世界へと広がる。真間の手紙奈伝説をはじめ、市川と万葉集との結びつきは深い。

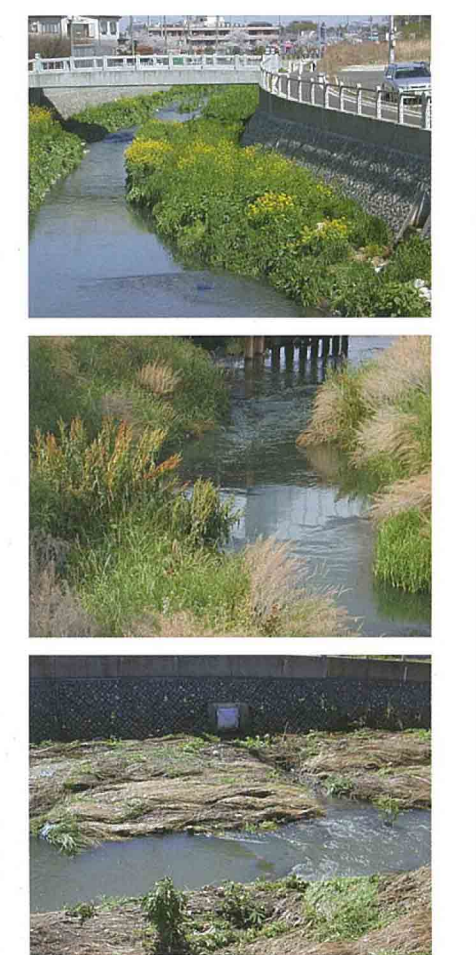


4 大野町1丁目の梨風東緑地。台地と低地の間に残された緑豊かな斜面林だが、住宅地に近づくと、落ち葉や日照で問題が起きることがある。

5 市街地の中の四角い調節池がごとと公園。南北二つの池からなり、ガマ、ヨシなどの植物の茂りが、ヨシコイ、オオヨシキリ、バンなどの野鳥の観察場所ともなっている。



大柏川の植物遷移



春にはセイヨウカラシナの菜の花、それが枯れる頃にはギシギシ。大雨が降ると水に流される所も出てくる河川敷の植物。川で運ばれてきたタネや、大雨による攪乱で毎年のように植物の顔ぶれが変わっている。

★植生断面図2点は、石井信義氏が1980年頃に描かれたもの。環境の変化に伴う現状との比較を現地で確かめていただきたい。  
★道路は主なものだけを示してある。縮尺はほぼ 1:17000。およその目安は6cmが1km。

2 万葉植物園のある台地から南へ続く斜面林が大野緑地。ここから北東方向に1.5kmほどのところに大町の自然観察園がある。



3 五中周辺のグラウンドを囲む斜面林はコナラ、イヌシデ、クヌギなど。平将門にちなむ史跡がここにもある。



6 宮久保の白幡神社と長寿藤で有名な高円寺。そのすぐ北側に三面大黒天への急な階段。地形図から標高を読み取ると、15mほどの高低差があることが判る。台地の上は、かつては照葉樹の林だった。台地に降った雨がしみ出し、今も湧水に恵まれた地域となっている。

7 宮久保の白幡神社付近は海蝕崖に由来する急斜面で、スダジイなどに囲まれた見事な照葉樹林だったが、今は住宅地にはさまれて、少し寂しくなってしまった。

6 三面大黒天 高円寺

7 白幡神社



8 バス路線から少し外れると、今まで気づかなかった風景に出合う。派川大柏川の流れるもそのひとつ。市街地を流れる川は、コンクリートで仕切られたり、暗渠になったりして川が存在が忘れられてしまうこともある。市街地の水循環を考える、まち散歩の視点でもある。

11 大町のバス道路（国道464号）沿いはナシ畑が広がっている。大町小の校庭奥に続くわんぱくの森は、あまり知られていないだけに、意外な自然にめぐり合えるかもしれない。



12 大町駅に近い日枝神社。1670年にこの地域の開拓が始まり、新開地の鎮守様として祀られた。参道入口の大きなイチチョウが目印。



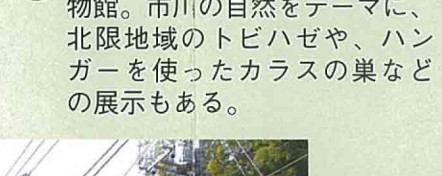
13 日枝神社から少年自然の家へ通じる細い道は、両側に四季の表情豊かなケヤキなどの並木が続く。その奥はナシ畑、野鳥の声も楽しい。



14 遠くからも見える丸いドームはプラネタリウム、少年自然の家のシンボル。この下がキャンプ場、そこからグラウンドを通じて自然観察園へ抜ける道もある。



20 動植物園管理棟の2階が自然博物館。市川の自然をテーマに、北限地域のトビハゼや、ハンガーを使ったカラスの巣などの展示もある。



22 市川では少なくなってしまった田んぼと斜面林が、セットで見られる大野町4丁目の風景。北側では、モウソウチクが目立つようになった。



21 バス停からすぐ東に入ったところにある動植物園入口。奥の自然観察園へは、切符売り場の右側の通路から入っていく。



23 柏井の市民キャンプ場の周辺には、イヌシデ、コナラ、エゴノキなどの雑木林が広がっている。場所により管理の仕方方もいろいろで、下草の種類などを調べてみるのも楽しい。



24 明治26年に最初の発掘が行われた国指定史跡の姥山貝塚。東西130mの南に開いた馬蹄形で、竪穴式住居跡やハマグリなど、30種類の貝も見られた。



25 太鼓の霊場とも呼ばれる唱行寺は、かつて梶川与惣兵衛の知行地であった。入口付近には、庚申塔や馬頭観音が並び、1970年の文化庁の調査でも学術上貴重な生物群集の場所とされ、巨樹も多い。



10 湧水を利用して、小中学校の体験学習の場にもなっている市民プール前のミニ自然園。市民グループが田んぼ作りに出し、収穫祭など四季の行事が計画されている。



15 北総線の大町駅から歩いて10分、自然観察園の北端へ階段を下りて入るコースもある。この地域は動植物園なども加えると、約11haの大町公園となっている。



16 湧水や深井戸からの水が池となっている北端の部分は、ハンゲショウなどの水辺の植物も楽しめる。



17 観察路奥の湧水地点。周辺の台地からのしほり水が南へ流れて、大柏川の水源の一つもなっている。ここからバラ園の後ろを流れる水辺が、オニヤンマのバトロールコース。



18 東側の斜面林は、コナラ、イヌシデなどの落葉樹が多い。春の芽だし頃の葉も素晴らしいが、エノキの黄色、コナラの洗いな茶色など、晩秋の多彩な紅葉も楽しい。



17 観察路奥の湧水地点。周辺の台地からのしほり水が南へ流れて、大柏川の水源の一つもなっている。ここからバラ園の後ろを流れる水辺が、オニヤンマのバトロールコース。

18 東側の斜面林は、コナラ、イヌシデなどの落葉樹が多い。春の芽だし頃の葉も素晴らしいが、エノキの黄色、コナラの洗いな茶色など、晩秋の多彩な紅葉も楽しい。

19 澄んだ湧水の流れるに、サワガニ、シジミ、ホタル、スナヤツメなどが生息する場となっている。遷移が進みすぎて開けた水面がなくなるのを防ぐため、茂りすぎた植物などを取り除く作業もされている。

20 動植物園管理棟の2階が自然博物館。市川の自然をテーマに、北限地域のトビハゼや、ハンガーを使ったカラスの巣などの展示もある。

21 バス停からすぐ東に入ったところにある動植物園入口。奥の自然観察園へは、切符売り場の右側の通路から入っていく。

22 市川では少なくなってしまった田んぼと斜面林が、セットで見られる大野町4丁目の風景。北側では、モウソウチクが目立つようになった。

23 柏井の市民キャンプ場の周辺には、イヌシデ、コナラ、エゴノキなどの雑木林が広がっている。場所により管理の仕方方もいろいろで、下草の種類などを調べてみるのも楽しい。

24 明治26年に最初の発掘が行われた国指定史跡の姥山貝塚。東西130mの南に開いた馬蹄形で、竪穴式住居跡やハマグリなど、30種類の貝も見られた。

25 太鼓の霊場とも呼ばれる唱行寺は、かつて梶川与惣兵衛の知行地であった。入口付近には、庚申塔や馬頭観音が並び、1970年の文化庁の調査でも学術上貴重な生物群集の場所とされ、巨樹も多い。

26 市川市動物園入口

27 市民キャンプ場

28 銀行寺

29 中山競馬場

30 市民プール

ナシ栽培の四季



ナシの花



人工交配



秋の収穫



宮久保から大町にかけての市川北部は、県下有数のナシの産地。4月の開花と授粉、夏の袋かけ、8月末からの収穫販売と、四季を遡っての忙しい作業が続く。